

〈本文〉

六番

左 勝

石蘭

破れ葉のツハに顔出す鼯かな

調柳

右

つわ咲や誰が引捨し雪車の跡

立些

左りの句、鼯とかいふものゝわが方を

見おこせたと云けんをのゝ薄

もおもひよせられておかしく侍るに、

引捨し雪車の句意しかときゝ得ず。

仍以左為勝

〈現代語訳〉

左 勝

石蘭

つわぶきの破れた葉から顔を出してこちらを見ている鼯であるよ。

* 「石蘭」は『書言字考節用集』に「ツハブキ」「ツハ」の訓みで載る。つわぶきはキク科の常緑多年草で丸い腎臓形の深緑色の葉を持ち、十月から十二月にかけて菊に似た鮮黄色の花を咲かせる。『毛吹草』『増山井』に「つはの花」で十月（初冬）の季語として掲出。貞門、談林時代をはじめ江戸時代を通じて作例の数はそれほど多くない。調柳の句では「破れ葉」とそこから顔（ツラ）を出す鼯の姿に焦点が当てられているが、破れ葉のつわぶきには当然葉よりも高い位置に花が咲いていると取るべきであろう。中七「ツハにツラ出す」というツ音の繰り返しが一句の声調を整え、リズムミカルな効果を生んでいる。「破れ葉」の語から連想される植物はまず第一に芭蕉であり、この句は、山居の僧のもとを「雪のうちの芭蕉」の精が訪れる謡曲「芭蕉」のパロディと捉えることもできようか。

右

つわの花が咲いた。雪車を引いた跡の残る雪の上に、誰かがその黄色い花を引き捨ててあることだ。

* 「雪車」は雪の上を人や物を載せて運ぶ物。「雪舟」「橇」とも表記する。『毛吹草』に十二月の季語として掲出。「雪車の跡」で、雪の上につけられた雪車を引いた跡の意。雪につけられた車の跡を詠んだ和歌として『雪玉集』（寛文

十年刊)に収載の「小車をたがひく跡かしたの帯のみちはかたがた雪にみゆらん」などがある。「引捨し」は、つわぶきの花を抜いて捨てたことを指すと解したが、「引く」は雪車と縁語であり、「引捨し」の対象を雪車と取り、引き捨てられた雪車の跡につわぶきの花が咲いた、と一句を解することもできる。ただしその場合「引捨し雪車の跡」とは具体的にどのような情景なのか、そしてつわぶきの花とどう関わるかなどわかりづらい点が多い。

〈判詞〉

左の句は「鼬とかいふものの……わが方を見おこせたる」という『源氏物語』手習の巻における小野の里でのできごと、またその小野にまつわる薄の伝承(小野小町のどくろの目の穴から薄が生え「秋風の吹くにつけてもあなめあなめ小野とはいはじ薄おひけり」と詠んだ伝承)も思い寄せられて、面白く思われるのに対して、「引捨し雪車」と詠んだ右句は句意がはっきりとわからない。したがって左の勝ちとする。

* 「鼬とかいふものゝわが方を見おこせたる」は、『源氏物語』手習巻において、入水した浮舟が横川の僧都に助けられ、小野の里にある妹尼の家で休んでいると、その母の老尼が夜半に起きて不審に思う次の場面の傍線部を踏まえると考えられる。

尼君しはぶきおぼほれて起きにたり。灯影に、頭つきはいと白きに黒きものをかづきて、この君の臥したまへるをあやしがりて、鼬とかいふなるものがさるわざする、額に手を当てて、「あやし、これは誰ぞ」と執念げなる声にて、見おこせたる

「をのゝ薄」は、「鼬とかいふ……」と書かれた出来事のあった「小野」の地名を出すとともに、その小野と結びつく小町の薄の伝承を続けて記したもの。つわの花の下の暗い葉陰から顔を覗かせる鼬の様子に、どくろの目穴から薄が生えた様子を想起したのである。「しかときゝ得ず」は、はっきりと理解できない意。「仍以左為勝」は、歌合の判詞などに用いられる慣用表現であり、漢字五文字の形(「左」の部分には「右」も入る)で、文末に用いられる。

『続の原』冬部の芭蕉判詞には、この他にも三番に「仍以持(仍って以て持とす)」などと用いられている。